

## えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑬

ひな人形は、さまざまに主な素材は紙、男雛女雛と姿のものが生み出されてき、もに立雛の古い形式を踏襲した。たとえば、立っているとした素朴なたたずまいの人か、座っているか、といった形だ。

今回紹介するのは、立ち姿のひな人形。立雛（たちびな）の多くは紙で作られていたことから、紙雛とも呼ばれる。最も古いひな人形の形式とされ、男雛（おびな）は腕を広げたヒトガタのような姿、女雛（めびな）は筒状に丸めた着物姿である。

この立雛は、八代村（八幡浜市）の庄屋菊池家に伝わったひな飾りを収納する箱の片隅から見つかった。

着物の色彩や模様、男女の大きさの著しい違いといった特徴がぴったり一致しており、菊池家の立雛がこの立雛であることは間違いない。他にも伊予市の商家のひな飾りの箱からもこの立雛が見つかっており、県内でも広く流通していたのではないだろうか。

博物館では参考資料として「雛百種」に記された「卯之町」の地名。当館が立つ卯之町と何か関係があるのだろうか。しかし「郷土玩具辞典」等を調べても土佐立雛の項はあるが、卯之町に関する記載は見当たらない。高知県の紙の産地に伊野町（現・いの町）があるので誤記なのかもしれない。

「雛百種」のはしがきに笛歌は、人形の素材によっては永く保存が難しいことを憂い、人形の姿を後世へ伝えるためにまとめた」と記している。土佐立雛のように素朴な紙製のひな人形は、その役目を終えると供養に出される頻度も高く見づかりにくい。「雛百種」によって土佐立雛の存在を知ることができたが、この立雛の生産地やどのくらい流通していたか、謎は深まらばかりである。

## 紙製素朴なたたずまい

## 土佐立雛



土佐立雛(左、明治時代)と「雛百種」。ともに  
県歴史文化博物館蔵

土佐立雛と「雛百種」はテーマ展「おひなさま」で4月3日まで展示。

〈専門学芸員・宇都宮美紀〉

〈随時掲載します〉